

近隣スポーツと交流し、オリエンテーリングの可能性を広げよう！それは普及だけでなく、オリエンテーリングの愉しみを広げてくれる。

■アウトドアスポーツの広がり

現在は独立しているアウトドアスポーツの多くは、本来融合したものであった。自然の中には高い岩壁や川や湖など、様々なバリアがある。それら乗り越えるためには、ナビゲーション、移動手段 (MTB やカヌー、ロープ等) の使いこなし、生活技術など様々なスキル (または複数のスキル) が必要であった。それを取り出しゲーム化したのが現在のアウトドアスポーツである。オリエンテーリングも例外ではない。

個々のスポーツが完成した形で入ってきた日本では、それぞれが独立したものとして扱われる傾向が強い。しかし、上述のように元々相補的なものであり、必要なスキルも根底のレベルでは似ている。互いに他のスポーツから学ぶべき点は多い。

アウトドアスポーツの中でいち早く競技化されたオリエンテーリング (競技的なアウトドアスポーツを、アスレティック・アウトドアスポーツ (AOS) と呼ぶことにする) は、その黎明期に多くの登山者が参入したことを除くと、他のアウトドアスポーツとは独立した路線を歩いた。しかしここに来て、様々な AOS がポピュラーになり、これらの AOS との交流 (クロスオーバー) が生まれつつある。

この記事では、近年盛んになりつつあるクロスオーバーの試み、その魅力や意義を、代表的なスポーツを紹介しながら紹介しよう。

1) ロゲイニング

ロゲイニングは、簡単に言えば大規模なスコアOである。広大な自然の中に設置されたチェックポイントを制限時間内で周り、できるだけ多くの得点を競う。制限時間が半端ではない。短くても3時間が普通であり、フルでは24時間 (当然夜間行動も生じる)、日本では通常12時間から6時間の制限時間が設定されている。

日本でのロゲイニングの歴史は菅平に始まるが、ロゲイニングがクロスオ



▲2008年朝霧ロゲイニングスタート直前。280人のアウトドアアスリート/ファミリーが一緒にスタートしていく様子は壮観であった。

バーの舞台として広がる兆しを見せたのは、2005年の奥武蔵でのレクロゲイニング以来であった。

レクロゲイニングの秀逸な発想は、チェックポイントにフラッグとパンチを設置する代わりに、予め撮られた特徴的な場所での写真 (たとえば、名所である神社) と同じアングルで写真を撮ることで通過証明とした点である。これにより、広大なエリアでの設置・撤収という運営上の負荷が大きく軽減された。写真は、いつでも撮ってこれる。フラッグを設置しないので、当日の運営は受付や計算処理だけとなる。競技に専念したい若いオリエンティアにとってもトレーニングついでにチェックポイント用の写真を撮ることができ、レク方式の発明によって、ロゲイニングは気軽に広大な自然に親しめるイベントとして広がる可能性が生まれた。

エリアが広いので1:25000の地形図が使われることが多い。従って、道のある場所やはっきりしたピークなどがチェックポイントになる。実はこの点が、クロスオーバーにとっては重要な働きをした。0マップ作成には多大な手間がかかる上、AOS活動者にとっては記号の種類も情報量も多すぎる。これが

他のAOS活動者にとっては高い敷居となっていたのだ。ロゲイニングではこの障害がなくなり、読図やナビゲーション技術を磨く練習の場、飽きずに長い時間自然の中を動き回れるトレーニングの場になった。本行なわれた霧ヶ峰や朝霧のロゲイニングでは、半数以上がオリエンテーリング以外のAOS愛好者である (下の図は2008年12月に開催された朝霧ロゲイニング280人中125人からのアンケート結果による集計)。

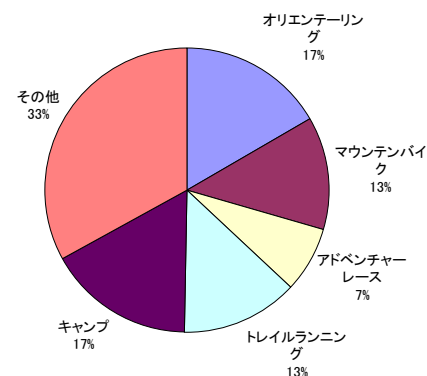


図:「普段しているスポーツは？」

長時間のレースは、一般初心者の排除にもならなかった。むしろ長い時間 (6時間程度) だからこそ、低強度で誰もが楽しめる。ポイントOとは違う制限時間制も、同じ舞台でトップからフ

ファミリーまで楽しめる要因になっている。5時間を走り続ければトップでもよい練習になるし、ファミリーでもゆっくり歩きお弁当でも食べれば5時間はあっという間である。「朝霧の大自然の中楽しむことが出来よい機会でした。家族で楽しめました、また参加したいです。」といった声が朝霧でも寄せられた。



▲子どもすれからトップアスリートまで同じ舞台で楽しめるのが、ロゲイニングの大きな魅力だ。



▲スタート前の作戦タイムは、ゲームとしての面白さを一層引き出している。

ロゲイニング出場者感想より

- 初めてでしたが、ポイントを探し当てる楽しさが分かりました。嵌りそうです！
- 地図を読み距離と方向を見て探す…。子供の頃以来だったので家族で凄く楽しめました。天気も良かったです。
- 素晴らしい景色の中、清々しい汗をかいて満足です。コントロールの設置場所も地図を読んで考えさせられて頭の体操にもなりました。

2)トレイルランニング

1980年代から山道を走るスポーツはマラニックやランニング登山として知られていたが、2000年を過ぎるあたりからトレイルランニングとして認知され普及した。バブルとも言える勢いで参加者を増やしたのは、ここ2-3年のことである。2008年には2000人を定員とする山岳耐久レースが申し込み開始翌日の夕方には締め切られるという異常な盛り上がりを見せた。

オリエンテーリング界では、1990年代当初から京都オリエンテーリングクラブが東山三十六峰レースを開催したり、初期の山岳耐久ではオリエンティ

アの田中正人氏が優勝するなど、そのつながりは深い。トップ選手のフィジカル面が不十分な日本のオリエンテーリング界において、トレイルランニングは、よい刺激にもなっている。

2006年には愛知県オリエンテーリング協会が、世界選手権の遺産を生かす形で三河高原トレイルランニングレースを始めた。他の多くのトレイルランニングのレースが長距離・厳しさを売り物とする中で、なだらかで走りやすいコースを売り物にし、独自の地位を築いた。ショートコース(約10km)を新設した2年目には軽く1000名を超える参加者を得た。また、日本オリエンテーリング協会でも群馬県協会との共催で赤城山トレイルランニングレースを2007年より始め、2年目には700名ほどの参加者を得ている。

ランナーからオリエンテーリングへの参入については私自身懐疑的である。しかし、東山の仕掛け人の久保氏の言葉を借りれば、「オリエンテーリングはすばらしい文化を持っている。それは競技者と運営者が常に一緒だということ、それによって培われたアウトドアでのイベント開催能力である。」それを生かすことはアウトドア界に対する社会貢献であるとともに、オリエンテーリングのプレゼンスを高める。



▲今やトレラン界に確固たる地位を築いた三河高原トレランレース(愛知県オリエンテーリング協会主催)。

3)登山者への読図講習

オリエンテーリングの黎明期には、登山を趣味とする数多くの人たちが読図の練習として参加し、その人たちの多くが今もオリエンテーリング界を牽引している。その後オリエンテーリングの競技化と専門化が進み、ナビゲーションも独特のものになった。こうして登山とオリエンテーリングとの交流の場が途絶えた。

私は1990年代の終わりごろからオリエンテーリングで培ったナビゲーション法が登山の地図読みやナビゲーションにも使えると感じ、本にまとめて2001年に山と溪谷社から上梓した。この本は売ただけでなく、専門家からも高い評価を得た。この本をベースに、2002年ごろからのべ30回、600人以上を対象に読図講習会を行ったが、いずれも好評であった。ここ10年以上、山岳遭難での原因のトップは道迷いである(このうち15-20名程度が毎年死亡していると思われる)にもかかわらず、体系的な読図指導の蓄積は登山界には少ない。それに対する危機感も読図に対するニーズを高めていると思われる。オリエンテーリング界が蓄積したナビゲーション技術は、オリエンテーリングのみならず登山その他のアウトドアスポーツの基礎的技術として十分有用であるといえるだろう。

最近では、新潟や岐阜でも同趣旨の登山者のための読図講習会が開催され、好評を博している。読図講習会の中では、たいてい1:25,000地形図を使った簡単なオリエンテーリングを行う。ここでは読図のポイントや難しさが分かったといった声をよく耳にする。



▲読図講習会での屋内講習と屋外講習。この秋開始したJR大人の休日倶楽部では、定員25名に70名以上の応募があり、急遽午後のクラスも新設した。潜在的ニーズの大きさが分かる

読図講習会への評価(3/23 日実施、9:00-16:00の講習で参加費 2000 円)

参加費は…

安い 4 / 手頃 17

全体的にみて

期待以上 7 / 期待通り 14

その他感想

●地形図と言うと、とっつきにくく学ぶ機会がなくて困っていたが、ゼロから必要なことを要点を分かりやすく教えていただき、直後に山に出て自分で考えて悩みながら最後まで辿り着くことが講義のお陰です。

●4 回受講させていただきました。毎回予習復習でとても楽しく地形図が好きになってゆくの自分でも分りました。(略)また機会がありましたら受講させて頂きたいと思いました。ありがとうございます。OL やトレイルランに挑戦したいです

●地図を使ったオリエンテーリングの基礎を学べたこと(よかったこと)

■なぜクロスオーバーか

私たちがクロスオーバーに目を向けるべき理由は以下のようにまとめられる。

第一には、クロスオーバーによってオリエンテーリングの愉しみが広がり、懐が深くなる。他の AOS アスリートと交流していると、オリエンテーリングにはないノリに刺激されることもあれば、逆にオリエンティアの良さやオリエンテーリングの持つ価値を見なすきっかけを与えてくれる。他の AOS との交流によりオリエンテーリング界を奥行きのあるものにもできるだろう。

第二に、クロスオーバーによって多くの人に門戸を開くことができる。読図講習会やロゲイニングのアンケートからは、ナビゲーションに興味を持つ人は少なくないことが分かる。しかしオリエンテーリングの情報は他の AOS 関係者には届きにくい。また大会はオリエンテーリング愛好者のために特化しており、敷居が高い。クロスオーバーすることで、他の AOS 活動者も気軽に参入しやすくなる。これは、アウトドアの安全という社会貢献にもつながるだろう。

第三に、普及である。今のオリエンテーリング界は、全体として普及への取り組みが十分ではない。しかし、ロゲイニングはシリーズ戦化したことで、初めて参加した AOS 活動者の心を捉え、継続した参加を生み出している。「初めてでしたが、ポイントを探し当てる楽しさが分かりました。嵌りそうです!」「地図を読み距離と方向を見て探す…。子供の頃以来だったので家族で凄く楽しめました。天気も良かったです。」といったロゲイニングに対する

感想は、それをよく表している。

■身近なクロスオーバー

もちろん、クロスオーバーにはそれなりの準備や予備知識がいる。たとえば、どんなにナビゲーションスキルが優れていても、1:25,000 地形図で山を歩いた経験のない人には、登山者に読図を指導することはできない。こうした中で、クロスオーバーを成功させるためのヒントとして、以下の3つを指摘したい。

1) 常設コースの活用

常設コース(パーマネントコース)は、比較的ポピュラーなハイキングコースや山域に設置されることが多く、難度も登山者やトレイルランナーのニーズに合っている。これらのコースを活用することで、容易にクロスオーバーの舞台を作ることができる。

講習会はもちろん、ナビゲーションの解説書を用意し、うまくショップとタイアップすれば、登山者や地図に興味を持つトレイルランナーに読図練習の一貫としていつでも気軽にナビゲーションの練習をしてもらえる。その前段階として、ショップと一緒に読図講習会を行なってみるのも門戸を広げることになるだろう。なお、日本オリエンテーリング協会を共催(名義)とした場合には日本山岳連盟の後援を得られるようになっている。

2) 大会におけるランナークラス、ナビゲーションクラス

大会のテレイン、地図、クラスやコースについても、考慮の余地がある。いずれも現在では、オリエンテーリングにあまりにも特化している。クロスオーバーのために第一に考えるべきはコースであろう。読図講習会やロゲイニング運営の経験から言えば、道の分岐や大きな尾根にあるコントロールとコースでも、未経験者には十分な難度を持つ。彼らが活動の中で道を外すことはまずないので、分岐で道を正しく選ぶことこそが持つべきナビゲーションスキルである。ランナーにとっても同様である。「ランナーズクラス」、「ナビゲーションクラス」といった、それぞれのニーズに合わせたコースを用意する必要がある。失格の不安のないスコア〇もポイント〇の大会の全コントロールを使えば容易にできるはずである。

レース前の「初心者説明」についても再考の余地がある。初心者が多かった朝霧ロゲイニングでは、前日の読図講習も思い切り易しく、演習も交えた実践的なものにした。昨年に比べ「難

しかった」という回答が減り、「役に立ちそう」とする回答が増えた。スタート前にコース地図を渡し、一緒に1番までのルートを考え、地図読みのポイントを具体的に確認するくらいの発想が求められる。もし人員に余裕があるなら、1番や2番に役員を置きアドバイスを与えるなども敷居を低くする上では有効だろう。今回のロゲイニングでも、スタート直後にアドバイスをする時間を設けたところ、数チームの利用があった。

3) 多様な広報

潜在的な需要のあるターゲットにうまく情報を届けるのは、なかなか難しい。広報の回路を工夫しないと、イベントにマッチした受講者層にうまく届かない可能性がある。ランナーをターゲットとするなら、彼らのニーズに訴える広報内容と回路(たとえばランナーズのランネット、スポーツエントリ)が、登山者であれば地域のアウトドアショップに協力を依頼することが、効果的である。

ロコミの重要性は強調してもしすぎることはない。最近私が開催する読図講習会で受講者集めに苦労しないのは、地域の登山ショップでの店頭広報を重視したからである。以下の朝霧ロゲイニングの参加者の情報源を見ても、ロコミが以下に重要な情報源であるかは分かる。そのためにもイベントのクオリティーは重要であるが、同時に主催者が熱意や思いを媒体に示すことが必要である(就活指南のようになってしまった…)。

■おしまい

競技オリエンテーリングの現状のみを捉え、うつむき加減の人が多く思うに思える。しかし、私たちがもっと広い視点からオリエンテーリングを捉え、それに向けたアレンジの努力を怠らなければ、オリエンテーリングには大きな可能性と豊かな広がりがある。近年のクロスオーバーの経験、とりわけ2008年度のロゲイニングシリーズの経験は、このことを如実に物語っている。それを顕在化させていくことは、私たちの愉しみを広げるとともに社会的使命を果たすことにもつながる。

(村越 真)